

平成 26 年度卒業式式辞

卒業生のみなさん、おめでとうございます。ご家族のみなさまの四年間のご苦勞に、なによりも、感謝申し上げます。みなさまの支えなしでは、今日という日を迎えることはできなかつたでしょう。

思い起こせば、あなた方の入学直前でした。2011 年 3 月 11 日、15メートルを越す大津波を伴った未曾有の大震災が、東北地方を襲いました。圧倒的な波の力。あまりにも大きな激しい喪失感に、日本中の誰もが人間の日々の営みの意味が、音を立てて崩れ去るような暗たんたる思いになりました。そんなショックから立ち直ることが出来ないままに、私はあなた方を教室へ迎え入れることになりました。私は演劇が専門ですので、当時、「舞台芸術の世界」という講義を担当していました。強いショックを受けて、心に痛みを抱えている新入生の人たちに何と声をかけたらいいいのか、講義をはじめる最初の言葉には、ずいぶん悩みました。結局、「みんな生きていてくれて、ありがとう」という言葉が口をついて出ました。私の声は、少し涙を伴っていたかも知れません。みんなが無事で入学してくれたことへの私の感謝の気持ち、生きていることの生命の大切さを思う気持ちを、学生たちは、敏感に感じて、すぐに素直に受け止めてくれました。

私はこんな大変な時に演劇って必要なものなのかな？と問いかけました。学生たちは、ぼつぼつと語り始めました。「今食べるもの、水、体を温める毛布一枚もないときに、演劇は必要ないけど、少し落ち着いたら、やっぱり演劇は必要だよ。だって、演劇は人の心を元気にしてくれるよ。人間って何かを人に伝えたいんだよ。」という議論がゆるやかに教室の中に広がっていきました。私は、被災地への思い、家族を失い故郷を破壊された人々の痛みを学生たちと共有しながら、この東日本大震災、福島の問題を、今を生きている同時代人としてどう捉えるべきかを一緒に考えていきました。

私は第一回目の授業を、プロメテウスでやることに決めていました。紀元前5世紀、今から約2500年以上も前にアイスキュロスによって書かれたギリシャ悲劇で、『縛られたプロメテウス』という作品があります。全知全能のおお神ゼウスは、最初、人間に火を使うことを許しませんでした。プロメテウスという神がゼウスに逆らって人間に火を使うことを教えたのです。

懲罰としてゼウスは、プロメテウスを300年間、絶壁にしばりつけ、毎日、おそろしい鳥に彼の肉体をついばませます。しかし、火を使わず、物を煮炊きするすべも知らない人間は、暗闇の中で恐怖に震えていたのですが、プロメテウスのおかげで、火を使ってしっかりした土器を作れるようになり、青銅や鉄の武器を開発し、食料を保存することも学びました。火を恐れなくなった人間は、電気という文明不可欠のエネルギーを手にいれ、

さらに機械文明をまっしぐらに確立していきました。ここで、大きな疑問に突き当たります。なぜプロメテウスは、人間に火を使うことを教えてくれたのでしょうか。そして、なぜ、ゼウスは、そもそもの始め、人間に火を使うことを許さなかったのでしょうか。

学生たちは電気がない生活なんか考えられないよと口々に言いました。そこで彼らは、ふと福島原発の大災害を思い出しました。それこそ、プロメテウスが教えてくれた火の取り扱いにおける究極の危険と思えたのです。何とも言いようのない重苦しい雰囲気の中で、教室中が、ゼウスは人間が文明の力を過信して、やがて自分たちの制御出来ない力を作り出すことを恐れたのかもしれない、と気づいたようでした。

人間は文明を正しい方向にむかわせているのでしょうか。学生たちは、それでもプロメテウスはどうして人間に火を使うことを教えたのかという疑問に一生懸命答えようとしていました。どちらが正しいかの答えは簡単には出ません。

学問するということは2500年も前に書かれたギリシャ悲劇を、自分たちの日常生活の中で考え、心揺さぶられる経験として実感することが必要なのです。あなた方はこの作品の中に、福島の問題を、今生きている自分たちがどう捉え、どのように人間の英知で解決できるのかを考えるように突き付けられていることに気が付きます。「今君たちが、失われた多くの命のことを考えていることが、2011年を生きるということだよ」と講義を締めくくりました。よほどこの問いかけは彼らには強烈なイメージだったのかもしれない。それから以降、教室の外で、私のことを「ゼウスの先生」と呼んで、声をかけてくるようになりました。

みなさんには今を生きるということ、同時代人として今を生きる自分という意味をしっかりと考えていただきたいのです。教育を受けるということは、今を知ることです。そして、今を生きて、初めて教育の成果が現れるのです。今を生きるということはその時代の苦しみを引き受ける事であり、それを乗り越えた時あなたがたは、さなぎが蝶に脱皮するように、自分を変えることが出来るのです。この思いを経験して初めて、被災した方々の悲しみや苦しみに共鳴する心を持つことが出来るようになるでしょう。陸前高田の仮設住宅に水を届けるというボランティアに参加した時に、家も田畑もすべて流された初老の女性が、学生たちに当時の惨状を話してくれました。女子学生たちは涙を浮かべて聞いていました。私は思いました。悲しみは誰かに受け止められたときに少しだけ和らぎ、小さな一歩を踏み出すことが出来るのだと。

今、新聞を広げると、中東からの、むごいニュースや、国内では少年の痛ましい事件が飛び込んできます。人の心のあまりの荒廃ぶりに、私は学生時代に読んだマハトマ・ガンジーを読み直しました。彼はインドがイギリスから独立するときに、国民に非暴力を訴えて独立を勝ち取った人です。ガンジーは言いました。「私たちの歴史は、戦いの記録で埋められている。まるで、この世界は戦争や暴力によって作られたかのようだ。しかし、それ

が本当だとすれば、世界には、なぜ、まだこんなにも大勢の人々が生きているのだろう。この事実は、極めてシンプルなことを物語る。私たちの世界は、戦争や暴力によってではなく、慈悲と愛の力でできているのだ」と。読んでいて、少しだけ、心が穏やかになりました。現実には民族間の争い、宗教の対立、貧富の格差問題。まだ解決の端緒にもありませんが、人は変わることが出来ると私は信じています。今、憎しみの炎に身をこがしている人たちに、私たちが憎しみの心で立ち向かっても、その連鎖を断ち切ることはできません。大切なことは「戦いは終わるはずがないと決めつけない」こと、「自分と考え方が違う人を受け入れ、理解しようとする心を自分の中に育てること」です。

ガンジーは「不寛容は暴力のひとつだ」という言葉を私たちに残してくれました。自分と異なる考え方を受け入れない態度も暴力の一つの形だということです。私たちは、知らず知らずに不寛容という暴力を行使しているのでは、ないでしょうか。お互いの違いを受け入れる真の民主的精神を育てるのは教育の力しかありません。みなさんの東洋学園大学での4年間での学びを思い出してください。頑張っ勉強して、知識が増えたけど、はたして社会に出てこれが役に立つのだろうかと考えている人もいるでしょうが、勉強の意味は別の所にあるのです。勉強によって鍛えられた力、それは2500年も前に書かれた作品から、「今」を読み解く力、あふれる情報の中で正しい情報を見極める力、推論する力、さまざまな考え方を受け入れる力、人生の瞬間瞬間を学びにする力、自分が正しいと思ったことをやり通す情熱と持久力、間違っことに対してはノーと言える強い力を、身に着けたはずで

これらの学びからあなた方が受け取った知恵こそが、周りの人々の、世界の怒りを鎮める力になり、平和を築くために少しでも貢献する武器になるのです。あなた方一人ひとりの知恵が、自分と違っ他者を受け入れる心を育て、周りに惑わされることのない主体的な自分を築くことが平和への第一歩なのです。

ガンジーは、さらに言います。「人を信じる心をなくしてはいけない。人間性とは広い海のようなものだ。数滴の汚れで、海全体が穢れることは決してありえない」。ガンジーは人間性への限りない信頼が新しい歴史を作ることを、明るく確信していたのです。

東洋学園大学は、来年度で90年の歴史を刻むこととなります。その長きにわたって受け継がれてきた学びの原点は自強不息、日々たゆまず努力し続けることです。自分がどう生きたいのかという志を持ち、自分が与えられている役割の中でどんな責任を果たすべきなのかを考え続けてください。いつの日か、みずからのいたらなさへの強烈な渇きに出合うことになるでしょう。のどが乾いたら水を飲むように、誰もが持っている豊かな可能性に栄養を与え続けてください。あなた方は、そのうち、きっと自分ではまだ気づいていない自分の豊かさに出合うはずで

卒業にいたるまでの4年間、教師から大きな塊となって突き付けられた学問の道、その大きな塊を少しずつ友人と共に消化していった学びの日々、学友とともに分かち合った喜び、困ったときの職員からのアドバイス、多くの悩み、立ちほだかる高い壁、そしてそれを乗り越えた時の解放感。この東洋学園大学で過ごした4年間、たくさんの経験をしてきたと思います。その経験のすべてが、あなたの未来へとつながっていくのです。今は、自分の中で、一つ一つの経験がうまくつながっていないとしても、これまでの22年間の経験を思い出してください。一つの経験がもう一つの経験とつながり、あなたの後ろには自分の足で歩んできた道が出来ているのです。それは、あなた自身の道であり、同時に日本人の、そして世界の歴史へとつながっているのです。

あなた方は一つのことをなし遂げて、今日を迎えることが出来ました。春の訪れとともに、これから花を咲かせようと必死になってわが身を膨らませている桜のつぼみに、いつも感じる命の躍動感を、わたしは皆さんに感じます。今、社会へさっそうと旅立つあなた方を前にして4年間の学びに敬意を表し、一人ひとりを誇りに思います。素晴らしい旅立ちになりますように。

皆様の健康と幸せを心からお祈りして私の式辞といたします。

平成27年3月20日

東洋学園大学 学長 原田 規梭子